

# 夙川学院短期大学 教育実践研究紀要

第5号【2012】



立体紙芝居  
作：大谷 めぐみ  
専攻科(保育専攻)2012年度卒

## 教育実践研究論文

### <第3類>

- ・幼児音楽特別研究における教育実践 [I]  
—歌唱・ピアノ伴奏の実技発表を通して学生たちが得た気づき—
- ・音楽的基礎力向上手法の実践と考察

(朝野 典子)

(井本 英子)

### <第6類>

- ・授業における基礎的条件に関する一考察  
～学生間の人間関係から～

(大森 宏一)



夙川学院短期大学

# 教育実践研究紀要

第5号【2012】

【教育実践研究論文】

<第3類>

・幼児音楽特別研究における教育実践 [I]

—歌唱・ピアノ伴奏の実技発表を通して学生たちが得た気づき—

朝野 典子 ..... 3

・音楽的基礎力向上手法の実践と考察

井本 英子 ..... 17

<第6類>

・授業における基礎的条件に関する一考察

～学生間の人間関係から～

大森 宏一 ..... 18

・「あとがき」

FD 委員長 岡崎公典 ..... 25

## 夙川学院短期大学「教育実践研究紀要」【SBET】投稿の手引き

### 1. 原稿の種類 (年1回3月発行)

教育紀要に記載されるものは、以下に示されるカテゴリーに分類される。

- 第1類：大学教育の理念や思想に関するもの
- 第2類：大学教育の制度、法およびその運用に関するもの
- 第3類：大学における専門教育に関する方法、技術、課題に関するもの
- 第4類：大学教育に適した教具・教材の開発およびその利用効果に関するもの
- 第5類：大学生の心身の特性と教育のあり方に関するもの
- 第6類：その他、大学教育の実践に関するもの

### 2. 投稿に関する手続き

- (1) 文の構成は、「問題の所在 (または目的)」「方法」「結果」「考察」「結論」を基本とするが、教育分野や論の特性に応じて適切な章立てを設定することができるものとする。なお、参考・引用文献等がある場合、必ず文末に付記する。
- (2) 原稿は原則として、Microsoft Word (表作成についてはMicrosoft Excel も可) により作成し、完成イメージで提出する。自筆による原稿の場合、自費 (または個人研究費) において入力費用を負担しなければならない。この場合、編集会議が配布するフォーマットを利用することが望ましい。その他、文字数・行数・フォント等、執筆の詳細についてはフォーマットを参照のこと。
- (3) 原稿は、完成イメージで4枚以上とし、最大10枚以内まで増頁することができる。  
なお、10枚を超える場合、分筆等を求めることがある。
- (4) 写真、図については、各自が画像ファイルとして作成し、原稿内に貼り込むものとする。全てグレースケールで印刷されるため、出版時に画像の精細等に関する要求は一切受け付けない。ただし、カラー写真による掲載を希望する場合、自費 (または個人研究費) により、載せることができる。
- (5) 投稿にあたっては、以下の2種の手続きのうち、いずれかによるものとする。  
<A> 投稿票、完成イメージで作成し印刷した本文、本文の電子ファイル、写真・図の電子ファイルを直接、FD委員会事務局 (教務課) に提出する。ただし、電子ファイルはMO または CD-RW に依存する。  
  
<B> 電子メールに、投稿票、本文、写真・図の電子ファイルを添付し、FD委員会事務局に送信する。

### 3. 編集に関する手続き

- (1) 原稿が投稿されると、編集会議において1名のピアスーパーバイザー (PS) が決定される。
- (2) PS は受稿後速やかに精読し、質問および意見をまとめ、投稿者に返信する。なお、PS が提示する意見や質問は、本誌が多様な読者を想定していることから、専門分野を熟知した内容でなくてよいこととする。
- (3) 投稿者はPS から提示された質問や意見について、回答または修正等を行い、再び提出する。
- (4) PS は回答または修正を確認し、「ピアスーパービジョン実施報告書」にコメント等、必要事項を記入の上、編集会議に提出する。

## 幼児音楽特別研究における教育実践[ I ]

### —歌唱・ピアノ伴奏の実技発表を通して学生たちが得た気づき—

朝野典子

ASANO Noriko

本稿は、夙川学院短期大学専攻科保育専攻において筆者が担当する科目「幼児音楽特別研究」の教育実践に関する研究である。当科目では教育および福祉の現場において「療育的な音楽活動」を実践するための技能の習得をめざしている。

この授業において前期と後期それぞれの終了時期に、学生たちが習得した歌唱とピアノ伴奏の実技力を発表する場面を設定した。発表後にはレポートを課し、「(1)歌唱実技発表を終えた感想・気づいたこと」、「(2)ピアノ伴奏実技発表を終えた感想・気づいたこと」、「(3)他者の実技発表に立ち会った感想・気づいたこと」の3項目について記述を求めた。本稿では2011年度および2012年度の履修生、合計43名より提出されたレポートの内容を分析している。

分析の結果、実技発表を通して学生たちが得た気づきは、「緊張による影響に係る気づき」「緊張の原因に係る気づき」「コミュニケーションに係る気づき」「音楽表現に係る気づき」「その他の気づき」の5項目に分類された。実技発表を通して学生たちが得たこれらの気づきは、保育専門職に必要な音楽表現技能やコミュニケーション能力を向上させるうえで有効に働くと考えられる。

キーワード：実技、発表、歌唱、ピアノ伴奏、気づき

つの技能を統合しながら障害児や障害者を対象とする

#### 1. はじめに

保育専門職をめざす学生にとって人前で話し、歌唱し、ピアノ演奏や伴奏をおこなうといった力は、必ず獲得しなければならない技能である。専攻科保育専攻の選択科目である幼児音楽特別研究では、これらの音楽表現に係る技能を習得するための実技をおこなう。

この科目では、幼児教育および保育の現場のみならず、障害児療育施設や障害者福祉施設等においても幅広く対応できるような音楽表現力と指導力の習得をめざしている。具体的には、音楽性豊かな歌唱表現をおこなう技能、ピアノ演奏および伴奏をおこなう技能、コミュニケーション技能の3点があげられる。これら3

「療育的な音楽活動」においても指導力を発揮できるようになることが求められる。

授業のなかでは、前期と後期それぞれの終了時期に学生たちが習得した実技力を発表するための時間を設けている。実技発表は、2～3人を1グループとして互いに歌唱と伴奏の役割を交代する形態をとり、発表後にはレポートの提出を求める。

実技発表をおこなう経験は、保育専門職に求められる「演じる技能」と「精神的な強さ」を獲得するために有効に働くと予測される。また、他者と協力しながら音楽づくりをおこなう経験は、学生たちが個々に歌唱やピアノの練習に励むだけでは得られない気づきを

もたらすものと期待する。

【補足】 幼児音楽特別研究を履修する学生の多くは、保育音楽療育士資格の取得をめざしている。保育音楽療育士は一般財団法人全国大学実務教育協会が認定する民間資格であり、障害児教育において発達的な視点を取り入れながら、保育と音楽療育に関して高度の知識と技能をそなえた障害児の専門職として、さらに生涯学習に関与できる人材の養成をめざすものである。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象・期間

調査対象は2011年度の履修生23名および2012年度の履修生20名、合計43名である。

調査期間は実技発表を実施した2011年8月（前期）、2012年2月（後期）、2012年8月（前期）、2013年2月（後期）の4回である。

### 2.2 手続き

歌唱とピアノ伴奏実技発表の終了後、学生たちにレポートを課す。その記述から具体的な内容を抽出し、それらを分析して分類項目を設けて整理し、筆者の授業記録を参照しながら考察する。

## 3. 内容

### 3.1 実技発表の概要

前期、後期ともに実技発表の2ヶ月前（前期6月、後期12月）に、実技発表の概要と実施手順を学生に説明する。

#### 【実技発表の実施手順】>

- ・実技発表は2～3人で1グループをつくり、グループの全員が相互に歌唱とピアノ伴奏を担当する。
- ・グループはくじ引き、または話し合いによって決める。
- ・発表する楽曲は、授業時に習得した楽曲を中心にグループで話し合って決める。
- ・使用する楽譜は個人の実技力に合わせて、各自で選定する。
- ・実技発表の順番はくじ引きによって決める。
- ・歌唱者は実技発表の前に、子どもや障害者を想定した「導入」のための声掛けをおこなう。
- ・発表時間は、導入を含めて3分間とする。

- ・発表に立ち会う他の学生は半円形に並べた椅子に着席し、発表者に対して受容的な態度で臨む。

[写真] 実技発表の一場面



歌唱者とピアノ伴奏者が実技発表をおこなう。他の学生たちは発表者を半円形に取り囲む。

### 3.2 レポート課題

実技発表終了後、次の3項目についてのレポートを課す。

- (1) 歌唱実技発表を終えた感想・気づいたこと
- (2) ピアノ伴奏実技発表を終えた感想・気づいたこと
- (3) 他者の実技発表に立ち会った感想・気づいたこと

## 4. 結果

レポートの記述内容を整理・分析した結果、学生たちが実技発表を通して得た気づきは、次の5項目に分類される。

- (1) 「緊張による影響」に係る気づき
- (2) 「緊張の原因」に係る気づき
- (3) 「パートナーとのコミュニケーション」に係る気づき
- (4) 「音楽表現」に係る気づき
- (5) その他の気づき

### 4.1 歌唱実技発表を終えた感想・気づいたこと

#### 4.1.1 「緊張による影響」に係る気づき

レポートには「緊張した」「緊張して～だった」という記述が目立つ。学生たちが「緊張による影響」と感

じる内容は次のとおりである。

- ・声が震えた
- ・足が震えた
- ・思うように声が出なかった
- ・声が小さくなった
- ・高い声が出なかった
- ・音程がうまくとれなかった
- ・歌い出しの音をうまくとれなかった
- ・口を大きく開けられなかった
- ・表情がこわばった
- ・笑顔で歌えなかった
- ・歌詞を忘れて頭が真っ白になった
- ・楽譜にかじりついて周囲を見ることができなかった
- ・リズムに乗れなかった

#### 4.1.2 「緊張の原因」に係る気づき

緊張の原因について言及した内容は次のとおりで、練習や準備の不足、打ち合わせの不足が原因で緊張したととらえている。

- ・もっと練習していればこれほど緊張しなかったと思う
- ・事前に発声練習をちゃんとしていれば、もう少しリラックスして歌えたと思う
- ・伴奏者と速度や歌い出しについて打ち合わせしていなかったため、本番では焦って緊張した

#### 4.1.3 「パートナーとのコミュニケーション」に係る気づき

歌唱者の立場から、伴奏者とのコミュニケーションについて記述された内容は次のとおりである。

- ・友達が伴奏してくれたので力を合わせることでがんばろうと思えた
- ・パートナーが自分のために一生懸命練習してくれてうれしかった
- ・自分一人で弾き歌いするのと違って歌うことに集中できた。しかし、ここは強く歌いたいと思うところが伴奏者にうまく伝わらず、難しさも感じた
- ・ピアノに頼りすぎず、自分でしっかり歌おうという心がけが大切だと思う

- ・ピアノ伴奏者がまちがえても、気にせず歌うことが大切だと感じた

#### 4.1.4 「音楽表現」に係る気づき

歌唱技術についての気づきに加え、表情や周囲への視線の配り方といったふるまいについても記述されている。

- ・聴いている人に伝わるように大きな声ではっきり歌うことが大事だと気づいた
- ・自分の声に合った声域の曲を選ぶことが大切だと思った
- ・精一杯の気持ちを込めて歌うことが大切だと思う
- ・聴く人に何を伝えたいのかを大切にすることも大事だと思う
- ・聴いている人の様子も見ながら歌うことの大切さを学んだ
- ・歌うときの表情はとても大切だ
- ・笑顔で歌うことで歌に興味を持ってもらえると思う

#### 4.2 ピアノ伴奏実技発表を終えた感想・気づいたこと

##### 4.2.1 「緊張による影響」に係る気づき

歌唱実技発表と同様に、「緊張した」「緊張して～だった」という記述が目立つ。緊張の影響によって生じたと感じる具体的な内容は次のとおりである。

- ・手足が震えた
- ・不安でいっぱいになった
- ・頭が真っ白になった
- ・弾きまちがいをした
- ・どこを弾いているのかわからなくなった
- ・速度が速くなった
- ・練習のときのようにうまく弾けなかった
- ・一人で練習しているときにはまちがわなかった箇所でも本場は焦ってまちがえた
- ・相手に迷惑がかからないようにたくさん練習したつもりでも、緊張してまちがえた
- ・みんなの顔を見て弾こうと思っていたが、余裕がなくて弾くことに必死だった

#### 4.2.2 「緊張の原因」に係る気づき

緊張の原因についての記述は次のとおりである。歌唱発表と同様に練習や準備の不足、打ち合わせ不足を緊張の原因ととらえることに加え、伴奏者としてのプレッシャーから緊張したという記述もある。

- ・もっと練習していればこんなに緊張しなかったと思う
- ・あまり練習できていなかったから不安で緊張した
- ・伴奏合わせがあまりできていなかったので緊張した
- ・ピアノを弾いて歌をリードしていくのは、とても責任重大で緊張した

#### 4.2.3 「パートナーとのコミュニケーション」に係る気づき

ピアノ伴奏者の立場での「パートナーとのコミュニケーション」についての記述は、歌唱者としての立場よりも記述分量が多い。

- ・人のためにピアノを弾くことはすごくいいと思った。自分のことでない分、より頑張らなくちゃという気持ちになれた
- ・パートナーとおこなう発表なので友達のためにも練習できて、この発表のやり方は自分のためになったと思う
- ・協力して支え合い、共にがんばれたので楽しかった
- ・励まし合ったりして、コミュニケーションをとれたので、すごく良い経験ができた
- ・相手が歌えるように、相手のために練習をがんばった
- ・初めて人が歌っている時の伴奏をした。とても緊張したけれど、すごく楽しかった。
- ・歌う人に迷惑をかけないように練習して、最後失敗したけれど弾けてよかった
- ・一人で弾いてまちがえるのとはわけが違うので責任があり、いい緊張感が持ててよかった
- ・伴奏ではパートナーに迷惑をかけて本当に悪いことをしたと思った。もっともっと練習しないとダメだったと感じた
- ・伴奏をまちがえて、相手に迷惑をかけた

- ・歌いにくい演奏をしてしまい、相手に申し訳ない
- ・ミスをすると相手に迷惑がかかってしまうことがわかった

#### 4.2.4 「音楽表現」に係る気づき

ピアノ伴奏者の立場での「音楽表現」に係る気づきは、歌唱発表におけるそれよりも記述が多い。内容は、音量のコントロール、伴奏らしい演奏法、弾きまちがいへの対応等に関するものが主である。

- ・伴奏者は歌の引き立て役になれるのが大切だと思う
- ・歌がメインだからあまりガンガン弾かず、なめらかに弾くようにした
- ・歌いやすくするためにゆっくり弾くこと、あまり大きな音で弾かないようにした
- ・前奏は大きな音で弾いて、友達が歌い始めたら声よりも伴奏が前に出すぎないよう歌の調子に合わせて弾くように心がけた
- ・相手が歌いやすいように右手のメロディを強く弾いた
- ・相手が歌いやすいように、楽譜とは違う弾き方を工夫した
- ・歌いやすいように伴奏には変化をつけるようにした
- ・まちがえても、右手のメロディをきちんと弾けば歌ってもらえるとわかった
- ・まちがえても音楽の流れを止めないように弾き続けると、歌のペースを崩さずに楽しく歌うことができると思う
- ・ミスをごまかすことも必要だと感じた
- ・失敗してもすぐに切り替えて、次の小節を弾くことが大切だと学んだ
- ・歌い出しが入りやすいように、その部分を重点的に練習しようと思った
- ・ピアノを弾きながら周りを見ることができたらいいと思った

#### 4.3 他者の歌唱発表に立ち会った感想・気づいたこと

##### 4.3.1 「緊張による影響」に係る気づき

他者の歌唱発表に立ち会って感じ取る「緊張の影響」は、自分の発表の場合とは違って、受け止め方が肯定

的である。

- ・緊張して声が震えている人もいたけれど、がんばって歌っているのが伝わってきた
- ・恥ずかしがっていることが、周りからすれば恥ずかしく見えるのだと思った
- ・緊張していても大きな声で歌えるのがすごいと思った
- ・緊張していても一生懸命取り組みことが大切だとわかった

- ・笑顔で楽しそうにしている人を見ると、こちらも楽しくなる
- ・笑顔で話をしたり、歌っている人は歌の楽しい雰囲気が伝わってきて、よかったと思う
- ・楽しんで前を向いて歌うと、聴いているほうも楽しくなる。
- ・歌詞を覚えて聴く人の顔を見ながら歌うほうがよい
- ・自分の個性を出して、自分らしく演技するのがよいと思った

#### 4.3.2 「パートナーとのコミュニケーション」に係る気づき

記述は一例だけだが、演奏時のアイコンタクトについて記述されている。

- ・歌う人が伴奏者と時々目を合わせながら歌っているところがよかった

#### 4.3.4 その他の気づき

他者の歌唱発表を聴きながら、練習量と発表の出来栄えを関連づけて受け止めている。

- ・しっかり練習ができている人は、歌からそれが伝わってきた
- ・2人でよく練習しているグループは、とてもうまく合っていたと思う

#### 4.3.3 「音楽表現」に係る気づき

歌声から受け取る聴覚情報と、表情等から受け取る視覚情報について記述されている。

- ・歌詞を通して子どもに伝えたいこともたくさんあると思うので、それを伝えられるように気持ちをこめることが大切だと思った
- ・笑顔で楽しそうに歌う人、口を大きく開けて歌う人の姿を見て、歌詞がはっきり聞こえるように歌うことがポイントだと思った
- ・口の形がはっきりしていないと歌詞がはっきりとわからず、歌の雰囲気が伝わりにくく感じた。しっかり口を開いて言葉ををはきはき歌うことで表情も自然と明るくなり、気持ちよく聴いられる
- ・歌詞をまちがえても歌い続けることが大事だと思った
- ・大きい声の人は素敵だと思った
- ・声が小さくてもはっきり歌うことが大切だと感じた
- ・優しい声がよい
- ・表情の大切さを学んだ
- ・笑顔で歌うと、声も明るくなってよいと思った
- ・笑顔で顔を上げて歌う人は、聴いているほうも気持ちがいい

#### 4.4 他者のピアノ伴奏発表に立ち会った感想・気づいたこと

##### 4.4.1 「音楽表現」に係る気づき

歌いやすい伴奏とはどのようなものであるかを、具体的に感じ取っている。また、ピアノ伴奏に表現された個性を評価する記述が目立つ。

- ・歌いやすい人の伴奏はピアノもスムーズで、まちがえても止まらない
- ・伴奏は歌の流れをくずさないように、失敗してもそのまま弾き続けることが大切だということがわかった
- ・伴奏をまちがえても、すぐに次の小節を弾いていたのがすごいと思った
- ・その人に合わせたアレンジの仕方があることを学んだ
- ・歌の特徴に合わせて伴奏していた。自分もそういうふうには弾けたらいいと思った
- ・個人個人のレベルに合った伴奏を弾いていた
- ・ピアノのレベルに関係なく、その場に居る人が楽しく歌えるような雰囲気づくりが大切だと思った。みんな違ってみんないいと思う
- ・同じ曲でも伴奏によって雰囲気がガラッと違っておもしろかった

- ・楽しそうにピアノを弾くことが大事だと思った
- ・歌いやすい伴奏、歌にくい伴奏の違いがよくわかった
- ・安定した伴奏は歌いやすいことがわかった
- ・伴奏はゆっくりと弾いたほうが、歌いやすいと感じた
- ・歌の雰囲気合った伴奏だと、聴いている人が曲に乗りやすい
- ・楽しさが伝わる伴奏がよいとわかった
- ・歌う人に合わせた速度で弾くことが必要だと思った
- ・周りの様子を見ながら伴奏している人がいて、すごいと思った
- ・楽譜にかじりつくのではなく、周りを見ながらニコニコと弾くのがよいと思った
- ・伴奏者の表情も大切だと感じた

#### 4.4.2 その他の気づき

- ・3分という短い時間の中でも、聴く人の心にきくと届くことがたくさんあると思う。歌は人と人との心をつなぐ力があると思った

### 5. レポートの記述内容についての考察

#### 5.1 「緊張」の影響と対処

緊張を強いられる状況に置かれたとき、普段通りの実力を発揮するための方法のひとつとしてしばしば挙げられるのは、練習を十分に積んで本番に臨むことである。人前で歌唱や演奏をおこなう状況において緊張を克服することは、たとえプロの演奏家であっても容易なことではない。しかし、入念な練習や打ち合わせといった事前の準備をおこなうことにより、緊張から生じる演奏上の失敗を未然に防ぐことは可能である。

さらに、緊張によって引き起こされる心理的变化と身体的変化を経験的に把握し、繰り返し自分自身にフィードバックしておくことは、緊張する場面で平常心を保つために有効な方法である。

歌唱とピアノ伴奏の実技発表を経験した学生たちのレポートには、緊張に伴って生じる心理的な変化（不安、焦り、後悔等）と身体的な変化（手、足、声の震え等）が記述されている。さらに、そこから引き起こされる声の不調やピアノのミスタッチといった演奏上の不都合や失敗についても、レポートの記述から具体的に把握できる。

もし、学生自身が演奏上の失敗の原因を自覚し、改善しようと努力するならば、それは有意義な失敗経験として成長への糧になる。

一方で、緊張と一口に言っても、緊張そのものが必ずしも演奏に悪影響を及ぼすわけではない。レポートの記述にもあったように、プレッシャーや役割意識がほどよい緊張をもたらし、結果的に達成感が得られる場合もある。

また、実技発表における緊張が避けられないものならば、緊張してもなお実力を発揮できるような準備を整える必要があることに学生自身が気づく仕組みが必要である。この気づきを促す手段として、実技発表後のレポート課題は有効であったと考える。

実技発表で失敗を経験した学生は、発表直後にはマイナスの感情を抱きがちである。時には、失敗を恐れる感情が次の挑戦にブレーキをかけることもある。もし、このマイナスの感情に向き合い、克服すべき課題に気づくことができれば、マイナスをプラスの成長へと転換できると考えられる。

#### 5.2 他者の発表からの学び

人前で演じる行為においては、音楽的な要素という聴覚情報の他に、演者のふるまいや表情といった視覚情報も大きな意味をもつ。レポートには歌声やピアノの音という聴覚情報と、歌唱者や伴奏者の表情やふるまいという視覚情報の両方について記述されている。

ピアノ伴奏に関しては音楽表現についての記述が主であり、歌いやすい伴奏とはどのようなものであるかを具体的に感じ取っている様子が窺える。また、演奏技能の個人差を受容しながら、各自の技能に合わせた楽譜や編曲を加えた演奏に接するなかで、伴奏に表現された一人ひとりの個性を評価する記述が目立つ。

他者の実技発表に立ち会うことは、発表者を保育者と見立て、聴き手を子どもと見立てた状況でもある。このような場面を設定することにより、聴き手が魅力を感じる音楽表現の方法を、学生同士が学び合うことができたと推察する。

学生たちは他者の良い部分を見習い、自分の成長に役立てようとする主体的な態度で実技発表に臨んでいた。発表者を観察することを通して、自分自身が発表者となった場合を客観視できたものとする。

## 6. 実技発表の意義

### 6.1 コミュニケーション能力の向上

歌唱者と伴奏者は音楽づくりにおいて緊密に影響を及ぼし合う。実技発表では学生たちが2～3人のグループをつくり、全員が歌唱と伴奏の役割を順次交代しておこなうことにより、それぞれの役割を意識して協力しながらひとつの音楽をつくり上げる経験を持つ。

音楽表現の面では速度、音量、バランス等の要素を調整するために、練習段階から言語コミュニケーションによる打ち合わせを重ね、さらに発表時においてはアイコンタクトや呼吸といった非言語コミュニケーションによって相手に意思伝達をおこなう必要がある。

他者と協力しながらおこなう実技発表は、学生たちに個人演奏では得られない気づきをもたらしたと考える。おそらく学生たちは、何のために演奏技能の向上に励む必要があるのかという問いを、自分自身に投げかけたのではないだろうか。

1人でおこなうピアノ演奏であれば、ある程度の練習量で妥協していたかもしれないところを、パートナーの伴奏をするにあたり、相手のことを思っていっそう練習に励むという姿勢を示した学生が少なからずいる。このように他者を利するために最善を尽くそうとする行為は、社会的行動と呼べるものである。

学生たちのほとんどは、卒業後には保育専門職となってチームで仕事に取り組むことになる。相手のために努力する姿勢は、必ず将来に生かされるものと推察する。

### 6.2 「音楽表現」に係る気づき

歌唱時における気づきよりも、ピアノ伴奏者の立場での気づきに関する記述が圧倒的に多く、その大半がパートナーとの音楽づくりに関する内容である。これは、伴奏者として黒子的な立場にある時のほうが、相手のために演奏するという気持ちになりやすいためと考えられる。

ピアノ独奏であればあまり気にならないような音量や速度の設定、ミスタッチなどが、パートナーのために伴奏する状況では、それらに対してより厳しくならなければならないという自覚が生まれる。このように主体的な自覚をもって練習に励むことは、確実に演奏技能の向上につながるものと推察される。

音楽をつくり上げる喜びを他の誰かと分かち合う経験は、さらに身を入れて練習に励もうという動機になっていると考えられる。

### 6.3 実技発表の意義のまとめ

保育専門職に求められる「演じる技能」と「精神的な強さ」を獲得するために、人前に立って演じる実技発表は有効な学びの方法である。このような経験を重ねることは、演じる技能としても、また精神的な側面においても大きな力となって、「本番力」の強化につながるものと考えられる。

歌唱者として、またピアノ伴奏者としての役割を自覚しながらパートナーとともに音楽づくりをおこなったこの経験が、学生たちのこれからの社会生活に役立つことを期待している。

## 7. 参考文献

- 谷村宏子 (2012) 音楽療法の視点に立った保育支援の試み 兵庫：関西学院大学出版会  
 松井紀和 (1991) 小集団体験 東京：牧野出版  
 朝野典子 (2011) 保育音楽療育演習における実習経験の共有をめざす教育実践 [Ⅱ] —「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」の有効性— 夙川学院短期大学教育実践研究紀要第4号

### ピアスーパバイザーからのコメント

歌唱・ピアノ伴奏の実技発表後に書かせた学生のレポートを整理し、考察した報告である。レポートを書くことが、準備段階や他者の伴奏時に必要な練習や気配りなどを自覚するのに有効であることを指摘し、その「気づき」が、保育者として必要な社会性の涵養に繋がるとする。また、実技発表は、保育専門職に必要な「演じる技能」と「精神的な強さ」の育成に役立つと、実践の効用を伝えるので、今後の授業でも、実践と「気づき」が促されることが期待される。

(担当：児童教育学科 三木 麻子)

## 音楽的基礎力向上手法の実践と考察

井本英子

IMOTO Hideko

本稿は、本学児童教育学科の専門教育科目「音楽Ⅰ」における教育実践に関する研究である。保育士・教員養成課程科目としての音楽の分野で、学生に必要な技能を効果的に身に付けさせるための学習方法を考察するためのものである。音楽力を伸ばすということは、音楽を楽しみ、共感する音楽的な感性を磨く上で、歌唱や楽器演奏を通して音楽表現力を向上させていくことである。学生に求められる音楽力は多々あるが、鍵盤楽器学習初心者及び初級者には、正しい音楽的基礎力を確実に身に付けることが必要不可欠である。

音楽的基礎力の中でも「読譜力」の項目の授業実践を紹介し、その効果と今後の課題を考察する。

キーワード：音楽力、音楽的基礎力、読譜力、音名読み取り課題

### 1. はじめに

本学児童教育学科では、音楽関連の科目として、「音楽Ⅰ」（1回生前期）、「音楽Ⅱ」（1回生後期）、「保育内容・音楽表現Ⅰ」（2回生前期）が必須科目として設定されている。「音楽Ⅰ」の授業目標は『ピアノ実技のレッスンを通して、ピアノの基礎技術と読譜力の習得から幼児・児童の教育現場に対応できる技能を養う。さらに、音楽に対する感性を高め、幼児・児童の感性をも豊かに育てるための音楽教育のあり方を学ぶ。』である。授業形態は実習で、担当者別のピアノ実技の個人レッスンを行う。また必要に応じてグループ授業も行う。

本学は、入試科目に音楽の項目が含まれていないため、鍵盤楽器演奏経験の全く無い初心者から、幼少期よりピアノレッスンを受け、ピアノ講師の道を希望する学生まで、その音楽経験歴は幅広く、技術能力の差は大きい。

演奏技術が練習量と比例するのは周知のことであるが、自主的に練習に取り組むことを学生任せにはしておけないのが現状である。

1回生前期の授業期間一実質4ヶ月15回—の中で、音楽的基礎力定着及び向上のための効率的な授業カリ

キュラムを考案して、学習効果を上げることが教員にとって最大の課題となっている。

音楽的基礎力の中でも、保育士・教員養成校の学生に特に必要な項目としては、音楽の諸要素（メロディー、リズム、ハーモニー）を把握すること、楽譜を読み取ること、そして、ピアノ及び教育現場で使われるいろいろな楽器の演奏技術を習得することである。

授業は上記項目を総合的に取り入れた内容であるが、ここでは、音楽的基礎力の中でも必須要素となる楽譜を読み取ること、すなわち「読譜力」の部分を紹介する。

ピアノ演奏の譜面を読譜するためには、まず、譜表（音部記号—高音部記号・低音部記号—の記された五線譜）に記された幹音（変化記号によって変化されていない音）を読めることが第一歩である。その上で、派生音（変化記号—＃、♭等—を付けて幹音より派生させた音）を理解する。そして、音符、休符といった音価を把握し、リズムや拍子、調性、楽語等読み取ることができていく。今回は幹音の読み取りのみを実施。

本研究では、学生の音名読み取りの取り組みと成果、そして学生の意識変化を詳述する。

2. 方法

調査期間：平成24年4月～9月

調査対象：児童教育学科2回生

「音楽I」受講生4名

[設備上の問題で人数を限定しなくてはならなかったため、今回は4名のこのクラスの学生を対象とした。]

幹音読み取りの方法としては、幼児の場合、五線に記された音符を、絵・図柄として直感的に捕らえ、ゲーム感覚で覚える方法が有効であるが、成人の場合は、幼児にくらべ、知能が発達しているため、図的処理よりも数理的処理をしたほうが理解しやすい。そこで、単音を個別に反射的に速読するばかりではなく、音高の位置関係を数えて、単音ではあるが、前音とのつながりも手がかりにできるようにした。

3. 授業の展開と内容

毎回授業の最初の項目として「音名読み課題」を実施。音高の区別はつけず、「ドレミファソラシ」で記す。まず、課題[A]の制限時間内の正解数から、学生の現在の理解度を知る。その結果から各学生の理解度に応じた課題を実施。

<第1回授業>

課題[A] 全30問

課題[A]



課題の音域 は～3点ハ (C～c3)

(※譜例1参照)

(用語説明は3章末※音名譜例参照)

高音部譜表課題15問、低音部譜表課題15問。いずれの課題も最初に例題として、1点ハ(c1)を記し「ド」と答えを書いてある。また、いずれの課題も例題～第2問目は順次進行。各課題制限時間は2分間。

課題[A] 高音部譜表課題について

音域 イ～3点ハ (a～c3)

第8・9・13・14問目は加線

最大跳躍2オクターブと2度

問	例	1	2	3	4	5	6	7	8
音程	ド	2	2	4	3	5	7	4	7
※①		↑	↑	↑	↑	↓	↑	↓	↑

9	10	11	12	13	14	15
3	4	4	5	7	2oct + 2	4
↑	↓	↓	↓	↓	↑	↓

※①音程は度数のみ記す。完全系、長短系の区別はしない。「↑3」は前問の音より3度上がる、「↓3」は前問の音より3度下がる、を表す。

課題[A] 低音部譜表課題について

音域 は～1点ニ (C～d2)

第9・11・12・14問目は加線

最大跳躍1オクターブと3度

問	例	1	2	3	4	5	6	7	8
音程	ド	2	2	6	3	6	5	4	9
		↑	↑	↑	↑	↓	↑	↓	↑

9	10	11	12	13	14	15
3	5	6	3	9	6	10
↓	↑	↓	↑	↑	↑	↓

課題[A] 実施結果

学生	高音部譜表課題正解数	低音部譜表課題正解数
a	7	0
b	14	14 ※②
c	15	15
d	15	15

※② bの学生は第1回目の授業が欠席であったので、次週同条件にて実施。

学生 a の答案より

高音部譜表 1 点ハ (最初にドと記している) から五線内を数えながら読むことはできる。加線の読み方はわからない。ドレミファソラシドと音階の上行形は思い浮かぶが、ドシラソファミレドと音階の下行形には馴染みがなく認識しがたい。そのため低音部譜表の課題は最初のドが記してあっても、その後が下行形のため解答できない。

学生 a のみならず、低音部譜表については、一般的に馴染みがない。本学 1 回生鍵盤楽器経験者であるが、課題 [A] に関して、高音部譜表課題正解率は96.0%、低音部譜表課題正解率は79.9%。低音部譜表課全問正解者の高音部譜表課題正解率は100%、高音部譜表課題全問正解者の低音部譜表課題正解率は90.3%である。

<第2回授業>

学生 a は、第4回授業まで欠席。

学生 b は、前述※①のとおり前回課題を一週間おくれで今回実施。

学生 c, d は課題 [C] に進む。

課題 [C] 全40問

課題 [C]

課題の音域 は～3点ハ (C～c 3)

(※譜例2 参照)

高音部譜表課題20問、低音部譜表課題20問  
両課題とも例題は無い。上下に幅の広い跳躍は避けて3, 4度の跳躍が中心。全体の音域は広いが、慣れれば速く読めるようになりやすい課題。

各課題ごとに解答にかかったタイムを計る。同じ課題をしている学生どうして答え合わせをする。タイムと正解数を別表に記す。

課題 [C] 高音部譜表課題について

音域イ～3点ハ (a～c 3)

第10・12・13・15・18・19問目は加線

最大跳躍1オクターブ

問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
音程	ミ	3	2	3	5	3	2	3	4	2
		↑	↓	↓	↑	↑	↓	↑	↑	↑

11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
3	4	2	6	4	5	8	3	2	6
↓	↑	↑	↓	↑	↓	↓	↓	↓	↑

課題 [C] 低音部譜表課題について

音域 は～1点ホ (C～e 2)

第8・9・15・16・18問目は加線

最大跳躍6度

問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
音程	ド	4	3	5	2	5	3	6	2	6
		↓	↑	↓	↓	↑	↓	↑	↑	↓

11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
5	4	3	4	4	3	4	5	4	4
↓	↓	↑	↓	↓	↑	↑	↓	↑	↑

<第3回授業以降>

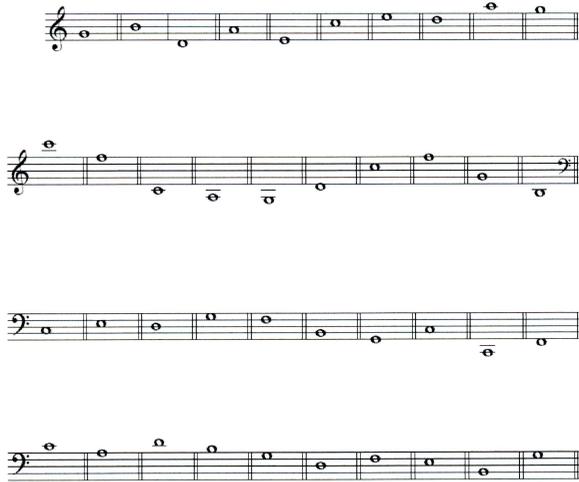
毎週一回ずつ計4回同じ課題に取り組む。5回目には課題を鍵盤奏で解答する。このときは音名だけではなく、譜面の音高と鍵盤の音高を一致させて解答とする。

課題 [C] を終了した学生は課題 [D] に進む。

学生 a は、同様の方法で課題 [B] に取り組む。

課題 [D] 全40問

課題 [D]

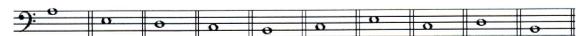


問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
音程	ド	3 ↑	2 ↓	4 ↑	2 ↓	5 ↓	3 ↓	4 ↑	8 ↓	4 ↑

11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
12 ↑	3 ↓	4 ↑	3 ↓	3 ↓	4 ↓	3 ↑	2 ↓	4 ↓	6 ↑

課題 [B] 全40問

課題 [B]



課題の音域 は～3点ハ (C～c3)  
(※譜例3 参照)  
高音部譜表課題20問、低音部譜表課題20問

課題 [D] 高音部譜表課題について  
音域 ト～3点ハ (g～c3)  
第9・11・12・13・14・15・20問目は加線  
最大跳躍1オクターブと5度  
前半は1～5番、6～10番のブロックで6度以内の音域内で動いているので速く読める。後半は上下の幅、跳躍ともに課題 [C] より難しい。

課題の音域 ろ～2点ニ (H～d2)  
(※譜例4 参照)  
高音部譜表課題20問、低音部譜表課題20問

課題 [B] 高音部譜表課題について  
音域 1点ハ～2点ニ (c1～d2)

1点ハ(ド)のみ加線  
最大跳躍6度  
順次進行を基本に1点ハ～2点ハまで数えずに読めるようになることをねらった課題。

問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
音程	ド	2 ↑	2 ↑	3 ↓	2 ↑	2 ↑	2 ↑	2 ↑	3 ↓	3 ↓

問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
音程	ソ	3 ↑	6 ↓	5 ↑	4 ↓	6 ↑	3 ↑	2 ↓	5 ↑	2 ↓

11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
4 ↑	5 ↓	12 ↓	3 ↓	2 ↓	5 ↑	7 ↑	4 ↑	7 ↓	6 ↓

課題 [D] 低音部譜表課題について  
音域 は～1点ニ (C～d2)  
第9・11・13問目は加線  
最大跳躍1オクターブと5度  
課題 [C] と同レベル。低音部譜表のさらなる定着をねらう。

11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
2	2	2	2	2	3	3	2	2	6
↓	↑	↑	↑	↑	↓	↑	↑	↓	↓

課題 [B] 低音部譜表課題について

音域 ろ～1点ハ (H～c 1)

1点ハ (ド) のみ加線

最大跳躍4度

音階の下行形に馴染み、下行して数えることに慣れることをねらった課題。

問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
音程	ド	2	2	2	4	3	2	3	2	2
		↓	↓	↓	↑	↓	↑	↓	↓	↓

11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
4	4	2	2	2	2	3	3	2	3
↑	↓	↓	↓	↓	↑	↑	↓	↑	↓

※音名譜例、音域譜例1～4

音名

はにほへといろハニホヘトイロハニホヘトイロハニホヘトイロハ  
C D E F G A H c d e f g a h c1 d1 e1 f1 g1 a1 h1 c2 d2 e2 f2 g2 a2 h2 c3

(※譜例1) 課題[A]音域

イ (a) 3点ハ (c3) は (C) 1点ニ (d1)

(※譜例2) 課題[C]音域

イ (a) 3点ハ (c3) は (C) 1点ホ (e1)

(※譜例3) 課題[D]音域

ト (g) 3点ハ (c3) は (C) 1点ニ (d1)

(※譜例4) 課題[B]音域

1点ハ (c1) 2点ニ (d2) ろ (H) 1点ハ (c1)

#### 4. 結果と考察

学生の取り組みの表を以下にまとめて示す。

学生 a

課題 [B]		5/24	6/28	7/5
ト音記号	タイム (秒)	63	40	41
	正解数	20	20	19
へ音記号	タイム (秒)	101	104	53
	正解数	19	11	20

課題 [C]		7/19
ト音記号	タイム (秒)	70
	正解数	18
へ音記号	タイム (秒)	18番 ※③
	正解数	6

※③ 120秒以内で解答できた問題数

7/19が「音名読み取り課題」最終日なので、課題 [C] に取り組む。

学生 b

課題 [C]		4/26	5/10	6/7	7/5
ト音記号	タイム (秒)	34	35	40	46
	正解数	20	20	20	20
へ音記号	タイム (秒)	61	65	53	46
	正解数	17	10	20	17

課題 [D]		7/19
ト音記号	タイム (秒)	34
	正解数	20
へ音記号	タイム (秒)	45
	正解数	19

学生 c

課題 [C]		4/19	4/26	5/10	5/17
ト音記号	タイム (秒)	78	54	57	50
	正解数	19	20	20	19
へ音記号	タイム (秒)	128	80	83	77
	正解数	20	20	20	20

課題 [C] 弾く		6/7
ト音記号	タイム(秒)	125
ヘ音記号	タイム(秒)	93

課題 [D]		6/7	6/28	7/5
ト音記号	タイム(秒)	55	57	67
	正解数	20	20	20
ヘ音記号	タイム(秒)	70	88	73
	正解数	20	20	20

学生 d

課題 [C]		4/19	4/26	5/17	5/24
ト音記号	タイム(秒)	55	54	51	39
	正解数	20	20	20	20
ヘ音記号	タイム(秒)	101	58	78	57
	正解数	20	20	19	20

課題 [C] 弾く		6/7
ト音記号	タイム(秒)	90
ヘ音記号	タイム(秒)	113

課題 [D]		6/7	7/5	7/19
ト音記号	タイム(秒)	46	48	44
	正解数	20	20	20
ヘ音記号	タイム(秒)	47	44	45
	正解数	20	19	20

「音名読み取り課題」は12回の実施となった。後半3回の授業は、実技試験準備で時間がとれなかった。第1回目は理解度確認の課題であったので、実質11回。欠席や6月第2週からの幼稚園実習のため授業の中断で、毎週の積み重ねになりにくい。学生 a の場合、前半の積み重ねの時期に欠席が多く、他学生との理解の差も開いてしまった。それでも、課題 [B] の3回目実施のあと、「やっとわかってきた。早くからしておけばよかった。」と前半の欠席を悔いていた。

前半に休まず積み重ね学習ができた学生は、各々が自分なりの達成感を感じて取り組んでいた。もともと再履修のため、第1回目の授業時は「音楽」の授業自体に非常に抵抗があるようであった。課題 [A] が100点だったことで気持ちが上向き、第2回授業では、抵抗無く取り組み、その後は、読譜できてきたことを実感でき前向きに取り組んでいた。学生 c は祝日のために2週間ぶりとなったときの実施でタイムが伸びなかったことをくやしがり、また学生 d も、3週間ぶりのときの結果をみて継続の大切さを口にしていた。

母集団が少ないこと、読譜以外の様々な音楽基礎項目課題も継続して行ったので、「音名読み取り課題」で培った基礎力とピアノ演奏力向上とが直結したか明言できないが、学生 b, c, d は前期末にはピアノ演奏力も向上した。

この結果より、「音名読み取り課題」の継続した取り組みは、第一に、学生の意欲喚起に有効であるといえる。音楽実技は、苦手と思っている学生にとっては、積み重ねに時間がかかり、すぐに結果がでにくくますます敬遠されてしまうのだが、達成感の感じられる課題を継続的に取り入れることで、学生の授業に対する取り組み方により影響を与えることを確信した。

第二に「音名読み取り課題」は、初心者でも確実に上達の手応えを受け取れる項目であることがわかった。五線上の音名の読み取りは、図柄(記号)を音名に変換する一つの取り決め作業なので、音楽的素養の有無にかかわらず、繰り返し音符を読む経験を積み重ねることで、速く読めるようになる。速く読めればそれだけ早く歌ったり、弾いたりすることができることを実感でき、演奏力向上につながることを期待できる。

## 5. 今後の課題

今後は、15回の半期の授業内で最も効率よくレベルアップするための「音名読み取り課題」の1回毎の課題量を検討していきたい。また、上・中級者が初心者と同時間内に更なるスキルアップができる有効な課題を研究して、音楽力に差がある大人数のクラスでもそれぞれがレベルアップしたことを実感できるような課題を作成して実践していきたい。

ピアスーパバイザーからのコメント

学生が与えられた課題によって達成感を感じることは、学生の学習意欲の向上に有効であることが伺えた。また、学生は達成感を感じることで音楽への学習意欲が高まり、同時に他の科目への学習意欲の向上につながることを期待された。本研究で成果を上げた学生が他の科目への学習意欲向上につながることを立証されれば、音楽的基礎力向上手法が他の科目に貢献することになる。「〇〇できない学生（例：達成できない学生、理解できない学生、自立できない学生）」を「〇〇できる学生（例：達成できる学生、理解できる学生、自立できる学生）」に導くことが我々教員の使命であると再確認した論文であった。

(担当：児童教育学科 藤島 みち)

## 授業における基礎的条件に関する一考察

### ～学生間の人間関係から～

大森宏一

OOMORI Kouiti

本稿は、保育者養成校における授業の基礎的条件に関する授業実践の紹介とその考察を行ったものである。特に演習や実技を伴う授業の場合、学生間の人間関係が授業の質に大きく関係していると思われる。今回は、学生間の人間関係をよくすること、あわせてコミュニケーション能力を向上させること、自己覚知を促がすことを目的として授業実践を行った。授業では「名刺交換」というワークを用いて任意の1対1の関係を作り考察を試みた。

本学に入学して、2年目(専攻科については3年目)の後期であるがこれまであまり話をしたことがない学生が半数以上おり、限られた範囲での人間関係しか構築していないことが明らかになった。また今回の授業によって人間関係がよくなったと考えられる回答が8割を超えた。今後はさらに早い時期から基礎的条件づくりに取り組み継続させる方法を考えていくことが大切である。また学生は人間関係をつくるのが苦手であること及びコミュニケーション能力が低下していることを踏まえて授業を実践する必要があると思われる。

キーワード：授業の基礎的条件、コミュニケーション能力、学生間の人間関係、自己覚知  
みた。

#### 1. はじめに

同じ授業をいくつかのクラスで同じような進め方で行った際、「やりやすい」と感じるクラスと「やりにくい」と感じるクラスがある。これは教員であればほとんどが経験をしたことがあるのではないかとと思われる。この授業の「やりやすさ」とはどのようなものであるかを考えた場合、授業の基礎的な条件が大きく関係していると思われる。当然、担当教員の資質や能力も関係が大きい。同じ教員が担当している場合においては、学生間の人間関係も授業の質に関係していると思われる。

本稿では、授業の基礎的条件である学生間の人間関係とコミュニケーション能力<sup>注)</sup>について考察を試

日本学生支援機構の調査<sup>1)</sup>では、約8割の大学等において「対人関係(家族、友人、知人、異性関係)」に関する相談内容が増加していると回答しており、現在の学生がいかに人間関係について悩んでいるかがわかる。また日本経団連<sup>2)</sup>によると、企業の採用選考にあたって特に重視した点として第1位(7年連続)にコミュニケーション能力を挙げている。学生を採用する側にとっては学生の知識や技能、専門性の前にコミュニケーション能力を重視しておりいかにその能力が大切かということとその能力の低下が顕著であることがうかがえる。

短期大学(保育士養成校)の授業においても、学生のコミュニケーション能力の不足や低下および学

生同士の人間関係が希薄であることが授業の「やりにくさ」の原因の一つであると思われる。

「社会福祉援助技術」「保育相談支援」の授業のように「人と関わることによって感じ、学ぶ」という演習を主とした授業では、学生同士の人間関係が「授業の質」を大きく左右すると考えられる。高橋(2010)は良い授業の条件として、「基礎的条件」と「内容的条件」の2重構造によって成り立つと述べている。<sup>3)</sup>

本稿では学生間の人間関係において「基礎的条件」に着目して検証を試みた。これは、内容的条件は基礎的条件を満たしたうえでこそ授業の目的・学習内容・ねらいが評価されると言えるためである。さらに「基礎的条件」は、授業の目標や内容、方法や形式に関係なく他の多くの授業に要求される条件であると考えた。

高橋(2010)<sup>4)</sup>は、良い授業について「授業の勢い」があり「雰囲気が良い」ことであると述べている。「授業の勢い」とは学習規律(学ぶ姿勢)・マネジメント(学習時間の確保)が整っていることであり、「雰囲気が良い」とは学習者が情緒的に開放されていて、学習者同士が肯定的な人間関係に支えられていることである。特に雰囲気をよくするための情緒的な開放や肯定的な人間関係は、学習者同士が何気ない話ができる関係にあるか、またそのような関係を作ってきたかということが関係する。

特に、実技や演習形式など学生同士がお互いにかかわりながら授業を行う形式では学生同士の人間関係が良い授業であるかどうかという「授業の質」に大きく関係していると思われる。

ここでは、演習をともなう授業において学生同士の人間関係とコミュニケーション能力について「名刺交換」というワークを用いて考察した。さらに授業の内容についてその効果を検証した。

普段の学生の様子から「非常に限られた少ない友達関係の中でしか自分のことを話す、友達のことを聴くという経験をしていない、またコミュニケーションをとるのが苦手である」という仮説のもと研究

を進めた。

さらに、実際の授業では、一人でも多くの学生と話をしたり聴いたりすることによってコミュニケーション能力を向上させ、より肯定的な人間関係をつくるきっかけづくりを目的として授業を進めた。

## 2. 方法

調査期間：平成24年11月5日～29日

調査対象：保育職志望の短期大学2回生73名

専攻科生41名 合計114名

授業科目：保育相談支援(2年)

社会福祉援助技術(専攻科)

授業のねらい：1対1でのかかわりにおいて人の話をよく聴く、自己開示をして自分のことを話す。肯定的な人間関係をつくりコミュニケーション能力の向上をはかる。またこれらのワークにより、「自己覚知」につなげる。

さらに、話をするときの互いの位置関係も、将来保育職(保育相談・対人援助する際)に就く場合の参考になるようにL字型をとるように座席を配置して面談及び相談援助の疑似体験とした。

授業の進め方：

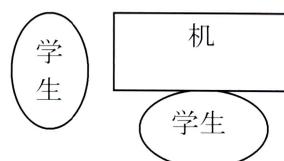
①一人7枚の名刺を作成する。(事前の授業、約30分)

図1 名刺の内容(例)

○○幼稚園(就職予定・希望の園など)  名 前  趣味・特技など
--

②1対1で話ができるように座席の指定をする。

図2 座席配置図



L字型での対話であるが、学生同士は並列の関係を基本とした。(カウンセラー役とクライアント役ではない)

③名刺交換の開始

- a、互いに挨拶をして名刺を交換する
  - b、名刺の記述内容、趣味、特技、将来の夢、友達、異性、TV番組、音楽、映画、スポーツ、「こう見えて実は私〇〇なんです」など（上記は板書き説明を加える。）をきっかけとして話をする
  - c、さよならの挨拶をしてメンバー交代する
- ④5分間で順次交代をする(合計7名と話をする)
- ⑤通常の座席に戻り、振り返りシートを記入する
- 振り返りシートの内容：
- a、名刺の内容：「こんな名刺を作りました」
  - b、ワークで感じたこと・授業の感想
  - c、友達について(話をしてわかったことなど)
- 上記3つの項目について、自由記述で記入できるようにシートを作成した。

述があるもので今回の授業においてこれまであまり話をしたことがないと思われる学生を累計した。

	学生数	これまであまり話をしたことがないと回答した学生数	
専攻科	41名	21名	51.2%
2年生	73名	42名	57.53%
総計	114名	63名	55.26%

分析調査の方法と研究の限界について：

調査は振り返りシートの記述及び授業の様子から多角的に解釈した。ただし、この授業研究は、情緒的な開放という側面を持っているため比較的自由的な雰囲気の中で演習ができるように心掛けた。そのため記述には信憑性に欠ける部分もあり限界があることを付け加えておく。さらに同じクラスであるかどうか、過去の人間関係がどうであるか、などについては配慮せずに学籍番号順を基本に組み合わせを決めたため偏りがどの程度あるかは不明である。

今回の調査では、半数以上の学生が名刺交換をしてこれまであまり話をしたことがないと思われる記述をしている。2年生の中には、「初めて話す子がほとんどでした」「初めて話す子ばかりだった」という記述もあり（2名）人間関係の希薄さが目に付いた。今回の結果のように「これまであまり話しをしたことがない学生」が多い中で、「情緒的に開放された肯定的な人間関係」の中で授業を行っているという状況は考えにくい。

3. 結果と考察

①振り返りシート(授業の感想・友達について)の記述の内容を下記の視点でまとめた。

今まで挨拶や自己紹介などあまり話をした経験がないと思われる記述を集計した。

ワードとして：初めて話をした、話をしたことがない人と話をした、初対面、普段話をしない人、しゃべったことがない人、1回もしゃべったことがない人、知らない人、あんまり話したことがない、という記

エピソード①学生との会話のから：

実習指導において、同じ実習先に行く学生はクラス、学年を超えて連絡を取るよう促した。そうすると上級生である専攻科の学生から、「それは難しいです」との答えが返ってきた。本学は本年度より児童教育学科単一であり、授業クラスを見て教室に行き誰かに聞けばすぐわかると思うが、そのことを伝えると「そんなことは無理」であるという。広大なキャンパスの中の何百何千人という学生の中から探すのではなく単一学科で教室も限られた中でのことであるが、「声がかけれない」ということであった。

エピソード②専攻科における通常の座席から見た人間関係から：

専攻科生は座席を自由にしている。しかし座席の位置を見ると、学期を通して、毎回ほぼ決まった座席に学生は着席し授業を受けている。また、いつもの席に座っていない場合、人間関係において変化（かかわりを避けて距離を置くケース）があった。筆者の知る限りでは、4名の学生が該当した。

筆者が今年度体験した2つのエピソードからも目の前にいる学生や近くにいる学生とのコミュニケーションを苦手とする者がいると考えられる。しかもごく限られた人間関係の中で学生生活を行っているように思われる。

「非常に限られた少ない友達関係の中でしか自分のことを話す、友達のことを聴くという経験をしていない、またコミュニケーションをとるのが苦手である」という仮説から検証を試みたが、振り返りシートや普段の様子から同じ結果が得られたと考えられる。

②振り返りシートにおいて、人間関係がよくなった、またはポジティブになったと考えられる記述。

ワードとして：楽しかった、よかった、喜べた、話せるようになった、話せてよかった、話してくれてうれしかった、話してみたい人と初めて話すことができた、たくさんの人と関わってよかった、盛り上がった、ステキだった、一致したときが本当に楽しい、しあわせな会話ができ、話したら笑顔がかわいかった、新鮮で楽しかった、普段以上にヒートアップする、仲良くなれた、話が弾んだらたくさん話せた、いい感じに話し合えた、新たな発見があった、気の合う人がいた、こんな機会があるのは良い、5分間アツという間だった、笑顔で話せると話しやす

い、いろいろ知ることができた、共感した、上記のワードを含み今回のワークを行うことにより人間関係がポジティブになった、また今後の関係が良くなると思われる記述を累計した。

	学生数	人間関係がポジティブになったと思われる回答した学生数	
専攻科	41	34	82.93%
2年生	73	58	79.45%
総計	114	92	80.70%

全体として、80%を超える学生がワークを行った結果、人間関係がポジティブになったまたは今後の関係が良くなると思われる記述をしている。今回の「名刺交換」というワークをおこなうことによって肯定的な人間関係のきっかけづくりになったと考えられる。このような機会を使って人間関係を作り上げていくことが必要であると感じた。

そのほかの記述において：

学生	記述内容
A	「人見知りだから普段あんまりしゃべらない子としゃべるときちょっとしんどかった。苦笑のせいで顔の筋肉痛い、 <u>意外な一面が知れた・あまり仲の良くない人としゃべると苦笑いになる</u> 」
B	「 <u>やっぱり人見知りスイッチON</u> でした、4月から社会に出るので人見知り少しぐらいは治さないといけないと思った」
C	「1対1でこういう感じで話すのは少し戸惑ったこともあった」
D	「大変だあー、自分については意外と人見知り」
E	「5分が長く感じしんどかった、話すの苦手、 <u>困ると笑ってごまかす、楽しくない時ほどよく笑う</u> 」
F	「かかわったことがない人とはどうすればよいかわからなくなりました、 <u>話をするのが苦手で相手から振ってもらってばかりだった</u> 」
G	「話の途中で恥ずかしくて下を向いていることもあった、ずっと相手を見て話せないと思った」
H	「人と話すの難しい、 <u>恥ずかしがり屋</u> でした、 <u>意外と楽しかった</u> 」
I	「どーしてよいかわからなかった、 <u>意外と喋れてると思った</u> 」

J	「話をしたことのない人と話すとき緊張した、 <u>すっごい思っていたより人見知りでした</u> 」
---	---

以上の10名については人間関係がポジティブになった、また今後の関係が良くなると思われる記述に累計していないが、記述（下線）からは、自己覚知にふれていると思われるものとして考えられることができる。

授業のねらいの一つである「自己覚知」につながるということも一部の学生ではあるが確認ができたと思われる。

なお、今回の研究について調査の限界があることは、初めに述べたが、今後さらに詳しく調査していく必要性を感じた。

#### 4. 今後の課題

今後の課題として、授業を行う際に「学生は人間関係づくりが苦手であり特定の限られた仲間としか話をしていない。またコミュニケーション能力が低下している。」ということ念頭において授業を行っていかねばいけないと思われる。

そのうえで、どのようにすれば人間関係づくりやコミュニケーション能力を向上させられるかを考えなければいけない。

このようなコミュニケーション能力の向上のために必要であることを高松（2006）<sup>5)</sup>は「家族でありながらメールで会話する親子。友達のうちに遊びに行き、ばらばらにテレビゲームをして無言で遊ぶ子どもたち。さらに成人してなお、生身の女性とは付き合うことができず、マンガやアニメなどの二次元の世界やフィギュアやアイドルなどの世界に癒しや安らぎを求める人々。メイド喫茶などのバーチャルな世界に浸る人。」という現在の若者の様子を述べたうえで、その能力の向上について次のように述べている。

1、相手が自分の仲間うちではダメである。初対面の相手や、年齢や職業、置かれている環境などが自分とはまるで異質の相手との対話訓練でなければ能力の向上には効果が薄い。

2、パソコンや携帯電話を通したものではダメである。生身の血の通った相手を、目の前において直に行うものでなければ能力の向上には効果がない。機械はあくまでも、本物のコミュニケーションを補完する力しかなく、真のコミュニケーションにとって代われるものではない。道具を使ったコミュニケーションは、それ以前に直にふれあう対話がある場合にのみ、それを補う形で有効となるだろう。携帯メールやEメール、チャットだけでは、コミュニケーション能力は向上して行かない。メールが打てること自体や、単にインターネットや携帯でつながっているだけではコミュニケーションとは言えない。また、ごくごく普通に行うことができることをやり続けたところで能力の向上には結びつかない。これは、呼吸や歩行など、いくら繰り返しても上手くはならないのと同じである。しかし、より高度な呼吸法や歩行法は実は存在し、それを身につけるには訓練により鍛えるしかない。

(抜粋)

今回の授業におけるワークは、学生にとっては生身の人間とのふれあいの実践であったと考えられる。これらを踏まえて、授業の基礎的条件である肯定的な人間関係をつくる、またコミュニケーション能力を向上させる。このような取り組みを入学時から行い継続させることが必要であると思われる。

そして、授業において、「会話できる雰囲気をつくるのがいかに重要であるか」を考えなければいけない。学生の会話は時として授業の妨げになる。それが至極特定の仲間だけであること。パソコンや携帯電話を通して行われることが問題である。

いろいろな人と会話ができる機会をつくること。

自由に話ができる雰囲気をつくること。これらが授業を行う上で重要である。

また本学に入学する多様な学生に応じて、授業そのものの在り方を問うことも必要である。

保育者養成校における人材育成として授業でなすべきことは何なのか、2年間という期間でどのような人材を育てるのかを考えて授業を行うことが今後の大きな課題である。

## 5. 引用文献・参考文献

- 1) 「大学、短期大学、高等専門学校における学生支援取組状況に関する調査（平成22年度）」集計報告（単純集計）  
2011（平成23）年6月
- 2) 独立行政法人 日本学生支援機構日本経団連「新卒採用に関するアンケート調査」（当該設問は2000年度（01年卒採用）から調査開始）アンケート調査結果（平成22年4月）
- 3) 高橋建夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖（2010）  
体育科教育学入門 大修館書店 p49
- 4) 高橋建夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖（2010）  
体育科教育学入門 大修館書店 p50
- 5) 高松正毅 高崎経済大学論集 第49巻 第2号 2006 p105～p114「現代のコミュニケーション環境とコミュニケーション論をめぐって」

注) コミュニケーション能力について、本稿では特に定義づけはしていない。よって対人関係における対話や交流が円滑であり人間関係を構築できる能力など広義にとらえている。

ピアスーパーバイザーからのコメント

「同内容・同方法」で展開している授業ではあるが、対象となる学生集団は異なる。授業は、教員と学生との「相互作用」によって成立することを改めて認識させられた実践報告である。「情緒的に開放された肯定的な人間関係づくり」「コミュニケーション能力の向上」は、教員にとって授業の基礎的条件であるとともに、学生自身にとっても、学生生活と卒業後の社会生活にとって基盤となるものであり、大学として入学時から継続的に取り組むべき課題である。この課題に対して、我々教員一人ひとりが日常の授業の中でどう取り組んでいったらよいか、示唆を与える実践報告である。

(担当：児童教育学科 岡崎 公典)



## あとがき

この度、『夙川学院短期大学教育実践研究紀要』の第5巻を発行することとなりました。

本学FD委員会では、学生による授業評価アンケートをはじめとして、評価結果の Web 上での公開や定期的なFD研修会の実施、などさまざまな活動に取り組んで参りました。かねてより教員同士が教育実践を発表し合い、その成果を共有していくことこそ「質の高い授業」につながるものと考えております。

今回は3編の原稿が寄せられました。いずれも教員自身が日頃から取り組んできた教育実践の努力の成果を示すものです。本学を取り巻く状況が大きく変化する中、FDの灯りをともし続けることができたことに安堵しております。

この『教育実践研究紀要』は、教員の相互支援精神に基づく相互研修型FDを理想として、全学的な教育力向上の一環として発刊しております。そのため、できるだけ広範囲からの投稿がいただけるように、すべての投稿原稿を採録することを原則としています。また、本紀要では査読制度を採らず、ピアスーパービジョン制度を設け、投稿者と編集協力者が、対等な立場から原稿の内容を協議し、質を高めて採録することを目指しました。

これらの試みが本学をはじめ、大学全体の教育力向上に寄与できればと願っております。

なお、本学は、本年4月より長年慣れ親しんだ西宮市甕岩キャンパスから神戸市ポートアイランドキャンパスに移転いたしました。新キャンパスのもと新たなFD活動が展開できればと存じます。

最後になりましたが、本誌の刊行にご協力いただいたすべての教職員の皆様に心よりお礼を申し上げます。

2013年8月31日

夙川学院短期大学FD委員会

委員長 岡崎 公典

<平成 24 年度「教育実践研究紀要」執筆者一覧>

特任講師 井本 英子 (児童教育学科/音楽・ピアノ)

特任講師 大森 宏一 (児童教育学科/福祉)

非常勤講師 朝野 典子 (児童教育学科/音楽・ピアノ)

<平成 24 年度 「教育実践研究紀要」ピアスーパーバイザー>

教授 岡崎 公典 (児童教育学科/教育学)

准教授 藤島 みち (児童教育学科/体育学)

准教授 三木 麻子 (児童教育学科/古典文学)

夙川学院短期大学「教育実践研究紀要」

第 5 号 (2012)

2013 年 8 月 31 日発行

編集発行：夙川学院短期大学 FD 委員会

〒650-0045 兵庫県神戸市中央区港島 1 丁目 3-11

(担当事務局) FD 委員会事務局

TEL: 078-940-1154

E-mail: fd@shukugawa-c.ac.jp



Shukugawa Gakuin College

# Bulletin of College Educational Research

~Shukugawa Gakuin College FD committee~

No.5【2012】

## Articles (Applied Field Research)

<Category-3>

- A Study of Education Practice in Special Study of Music for Small Children.Part1

•••ASANO Noriko

- Practices and Studies on Method for Improving the Fundamental Music Abilities

•••IMOTO Hideko

<Category-6>

- A consideration about the fundamentals in class  
~With respect to the human relations between students~

• ••OOMORI Kouiti